

佐渡島漂着イノシシ掘り起こしワークショップ

新潟大学佐渡自然共生科学センター 阿部晴恵

新潟大学佐渡演習林では、学内外の学生を対象とした実習だけでなく、地域貢献としてのアウトリーチにも力を入れてきました。今年度前半は、そのような活動も制限されておりましたが、ようやく秋口の10月31日に、市民向けのワークショップを開催することが出来ました。タイトルの「佐渡島漂着イノシシ掘り起こしワークショップ」と聞いて、どのような内容なのかイメージできる方は少ないのではないのでしょうか？まずは、開催までの経緯について、お話しします。

佐渡島は大型の植食性哺乳類が生息しておらず、とても豊かな下層植生が維持されています。ところが近年では、多雪地の北陸でもイノシシの目撃が増えており、佐渡島でも、2016年に1回、昨年からの冬は5回、特に冬場の時期にイノシシが漂着するという情報が増えてきました。佐渡島の縄文遺跡からはイノシシが出土しており、本州の集団とは遺伝的に分化していたようです。しかし、在来の島のイノシシが生息しなくなってから長い月日の経つ島へ、現生のイノシシが生きたまま上陸をしたらどうなるのでしょうか？島嶼自然生態系だけでなく、農業などの産業も大打撃を受けること必至です。漂着する生物の履歴を知ることは、もしかしたら将来的に泳いでやってくるかもしれないイノシシの移入元を推定し、移入元からの保護管理対策を立てる一助になるだけでなく、海に隔てられた佐渡島へどのように生物がやって来て、この生態系を構成してきたかを推測するための、貴重な研究に繋がります。このため、漂着イノシシの履歴を知り、自然史資料として保存することは、地域にとっての財産になります。

このワークショップでは、2020年4月に小佐渡浜海岸に漂着し、保健所の管理のもとで浜に埋めたイノシシを、約半年後に骨を掘り出すという、体験作業を行いました。この奇妙な？ワークショップには、4組12名の親子と新潟大学や新潟市内の専門学校生ら総勢28名が参加しました。講師には、大阪自然史センターの西澤真樹子さんに来ていただき、説明を交えながら作業を進めました。まずは掘り起こしたイノシシの骨の分別と洗浄、さらに哺乳類の体について知るために、事前に用意した様々な哺乳類の骨格標本のクリーニング、骨パズルの組み立てを行いました。



イノシシの骨洗浄中



ホネパズルで体の構造を理解する

イノシシの骨の洗浄作業では、「臭い〜」や「気持ち悪い〜」といった初めはなかなか乗り気じゃなかった参加者も、西澤さんによる「なまの」資料を使った体の構造に関する説明や、「現代の佐渡島第一号イノシシ標本となる貴重なご遺体である」という話を受けて、ピシッと空気が変わ

り、その後は、粛々と皮の中から骨を探し、分配される骨を厳かに受け取っていました。それらの骨を洗いつつ、じっくり観察することで、最終的には臭いも気持ち悪さもどこへやら、時間も忘れ興味津々で作業しているのが印象的でした。今後は、生物標本の重要性を肌で感じた参加者とともに、佐渡島の貴重な自然史資料を収集、保存、活用していくための拠点づくりを目指したいと考えています。なお、本ワークショップは、永井エヌエス知覚科学振興財団の助成のもと開催されました。